

「同郷・同好・同朋」を語る

# 受け継がれる志

第48回



土井香苗 (平成6年卒)  
弁護士・HUMAN RIGHTS WATCH代表

猪口邦子 (昭和42年編入・  
46年中退)  
衆議院議員

水島広子 (昭和61年卒)  
精神科医・前衆議院議員

# 私立桜蔭 中・高等学校



校名である「桜蔭」をそのまま図案化している。桜の花とその影を組み合わせることによって、特徴的なデザインに仕上げられている

在学中は、水島氏がフオークソング部、猪口氏が英語劇部、土井氏がテニス部に所属していた

**猪口** お二人とも、中高6年間桜蔭でしょう。私は父の仕事の関係でブラジルから帰国して、その後アメリカにわたるまでの中3から高2の間だけなんです。

**水島** 編入生は珍しいですね。

**猪口** ええ。当時は帰国子女をすんなり受け入れる学校は皆無で、公立でも私立でも年齢より下の学年に編入されるのが一般的でした。

**土井** 理不尽ですね。

**猪口** でしょう？「国を支える使命感を担い、海外で必死に働くビジネスマンの子弟に對し、試験すら許さないとはいかなものか」という私の父の声を真摯に受け止め、前例がないにもかかわらず受験させてくれたのは、桜蔭だけだったんです。

**水島** 我が家では、兄も父も親戚も、ほとんど全員が東京の男子御三家である武蔵へ進学していたので、幼いころから私も、「むちゃちちに行く」と心に決めていました。ところが武蔵は男子校(笑)。仕方なく女子御三家のなかで唯一宗教色のない学校だった桜蔭を選びました。小学生ながらもなぜか教育と宗教は分離すべきと考えていたんですね。

**土井** 私はいろいろな学校の文化祭に見学に行ってみたんです。そしたら桜蔭生が一番元気で楽しそうだったので、あんまり深く考えずに入っちゃ

やいました。

**水島** 私はOGを名乗るのも憚られるような問題児(笑)。パーマやスカート丈が短いなどという些細なことで、先生に目をつけられて毎日のように校門から職員室に連行されていたいました。

**猪口** 何か、原因があつて？

**水島** 私は、人間はクワを手を持ち、畑を耕し、額に汗して、働くべきものだと思っていた。何のために皆が一生懸命勉強しているのか、わからなかったのです。そんな疑問をかなり正面からぶつけても、答えてくれる先生がいらない。なにせ当時は東大に一番近い女子校と盛んに言われていた時代ですから。それで、何事にも反抗的になつたんだと思います。個人面談でも、「大学には進学せず、将来は農業をやる」と言い放つたら、先生は目をひん剝いていましたよ(笑)。

**猪口** 負けるわねえ(笑)。でも、私が在学中のころは素

晴らしい学校でしたよ。これからの女子は本物の能力を身につけるべきだと、使命感に燃える先生ばかりで、強烈な自負が感じられました。高邁な理想があつて、ことあるごとに、蟻の街の「マリア」の話が出ました。

**土井** 私も耳にタコができるくらい聞きました(笑)。

**水島** え？ 知りません……。

**土井** 桜蔭の先輩(北原怜子さん)のお話です。彼女は戦後間もなく、廃品回収で生計を立てる人たちが寄り添って暮らす蟻の街の存在を知り、毎日そこに通って、子供たちに読み書きを教えるなどの献身的な活動を続けるんです。

**猪口** 今でいう慈善事業や人道的支援の先駆者ですね。何不自由ない家庭に育つたお嬢さんが、一生を社会奉仕に捧

げ、最後は若くして結核で亡くなつてしまふ……。「手本とすべきは、彼女みたいな精神であつて、キャリア官僚になるとか、華々しい職業につくとか、そんなことではないんです！」とよく諭されました。

**土井** 私はその教えを真に受けちゃいましたね(笑)。大学時代はアフリカでボランティア。今は深刻な人権問題を解決する国際組織の日本代表です。授業中に配られた犬養道子さんの難民キャンプのルポルターージュ「人間の大地」に衝撃を受けて、南北問題に興味を持ち、国際問題に詳しい先生のところへ「将来、世界の難民を助ける仕事をした」と相談にも行きました。そのときに「猪口邦子さん」という先輩が書いた本が図書館にあるから読みなさい」とア

「手本とすべきは蟻の街のマリアであり、キャリア官僚ではない」とよく諭された





創立10周年を記念して建てられた本館は震災にも焼け残り、現在も使われている



平成15年に建設された地下2階、地上6階建ての西館。中学3年生から高校3年生までが使用している

### 私立桜蔭中・高等学校 沿革

大正13（1924）年、関東大震災後の女子教育機関の不足を補うことを目的に東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）同窓会桜蔭会によって、現在の場所に桜蔭女学校として創立される。大正15年、5年制高等女学校として、昭和5（1930）年、財団法人桜蔭高等女学校として認可される。昭和22年に

学制改革により桜蔭中学校となり、翌23年には桜蔭高等学校が設置され現在に至る。「勤勉・温雅・聡明であれ」を校訓にしており、女子高としては全国屈指の東京大学合格者数を誇っている。卒業生には東京大学准教授の加藤陽子氏、女優でアーティストの水森亜土氏、タレントの菊川怜氏らがいる。

修学旅行のときに車内で菓子パンをかじる水島氏



勉強だけでなくクラブ活動も盛んだ。下の写真はダンス部の活動の様子



ドバイスされたたんです。

**猪口** まあ！ 私の「戦争と平和」読んでくれたの？

**土井** はい。あのとき活字で出会った大先輩と、直接お目にかかる日が来るなんて。

**猪口** そもそもあの本を書くきっかけをくれたのは桜蔭だったのよ。高1の夏休みに日記を書いたんです。そうした

ら、のちに校長になる赤星秀

子先生が「稀なよい日記がある」とみんなの前で読み上げてくださった。わずか15分の

朗読が、帰国子女で日本語の文章力に自信がなかった私にとって、どれだけ励みになったか。あれで書くことが好きになった。今でも人生の分水嶺だったと思いますね。

**水島** そういえば、私も中2

のとき、国語の先生に薦められた本多勝一さんの『中国の旅』に衝撃を受けて、寝込んでしまいました。歴史や外交にすごく関心を持つようになった。また、苦意識の強

かった美術ですが、先生が良さを見いだして下さったので芸大進学を真剣に考えたこと

もありました。だんだん、桜蔭のよい面が甦ってきましたよ。

**猪口** あくよかった。やはり、桜蔭に行ってよかったのは高い理想を持てるようになったことと生涯の友を得たこと。

**土井** はい。いじめもなかったし、女子校ゆえに、外見で競うこともなくて、ざっくばらんな校風でした(笑)。